

志賀原子力発電所の 環境放射線監視結果及び温排水影響調査結果

石川県、志賀町及び北陸電力(株)は、発電所周辺の環境放射線監視及び温排水影響調査を実施しています。

今回は、平成18年7月～9月までの環境放射線監視結果「平成18年度第2報」及び平成18年度春季の温排水影響調査結果「平成18年度第1報」の概要をお知らせします。

環境放射線監視結果については、これまでの測定結果と同程度であり、志賀原子力発電所による環境への影響は認められませんでした。

温排水影響調査については、温排水によると考えられる異常な値は観測されず、水質・底質及び海生生物調査では全体として大きな変化は認められませんでした。

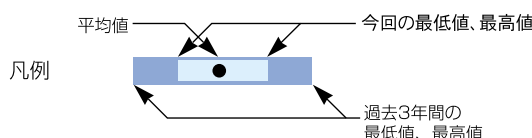
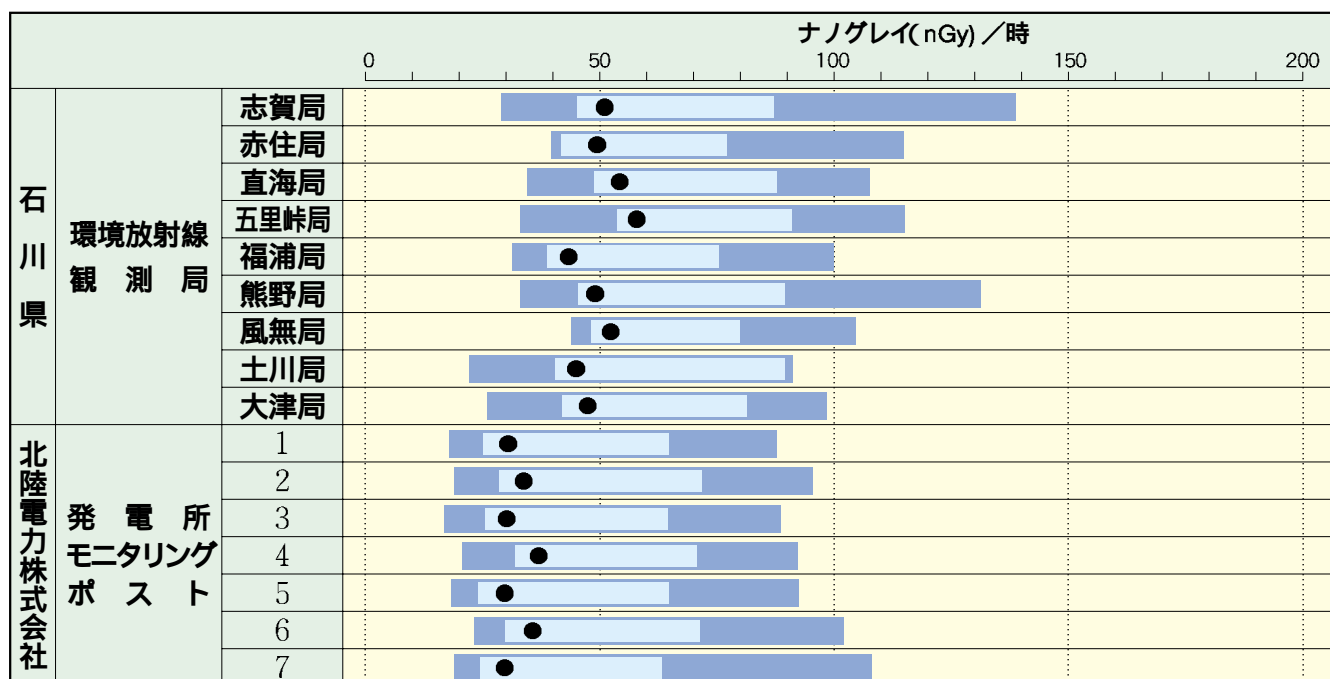
I 環境放射線監視（平成18年7月～9月）

1. 空間放射線

① 線量率*

環境放射線観測局(9局)及びモニタリングポスト(7局)における線量率の測定結果は次のとおりでした。

各局の線量率の高めものは、いずれも降雨等の自然現象によるものでした。(*線量率とは1時間あたりの放射線の強さをいい、短時間での変動の把握を目的としています。)



② 積算線量*

モニタリングポイント(45カ所)における積算線量の測定結果は、0.10～0.18mGy/91日で、過去の測定値と同程度でした。(*積算線量とは、3カ月間の空間放射線量をいい、四半期ごとの変動の把握を目的としています。)

(参考)

なお、1号機の排気筒モニタデータは5～6 cps(H2.7～H18.3までの測定値：5～7 cps)、1号機の放水ピットモニタデータは11～12cps(H2.7～H18.3までの測定値：11～15cps)であり、2号機の排気筒モニタデータは5～6 cps、2号機の放水ピットモニタデータ(H18.8～9)は12～13cpsでした。

※2号機放水ピットモニタデータについて

平成18年8月9日、北陸電力から2号機の放水ピット(放水槽)の放射線の測定装置に不具合があり、これまでの放水ピットモニタデータが適正でなかったとの連絡がありました。現在は、復旧し適正なデータとなっていますが、これまで「あともす」に掲載されたデータ及び今後平成18年8月までのデータについては、欠測扱いといたします。

なお、このことに関する詳細は、石川県原子力安全対策室のホームページに掲載してあります。

2. 環境試料中の放射能

環境試料について測定された人工放射性核種は、セシウム-137(Cs-137)、ストロンチウム-90(Sr-90)及びトリチウム(H-3)でしたが、いずれの濃度も過去の測定値と同程度でした。なお、セシウム-137、ストロンチウム-90及びトリチウムは、過去の核実験等によって自然界に広く存在しています。それぞれの放射性核種の濃度範囲は次のとおりです。

試料採取期間 平成18年7月～9月		セシウム-137濃度						
		単 位	0.01	0.1	1	10	100	1000
陸上試料	降下物*	ベクレル/平方メートル・月		●				
	浮遊じん*	ミリベクレル/立方メートル	●					
	陸水*	ミリベクレル/リットル				●		
	土壌	ベクレル/キログラム乾土			●	■		
	松葉	ベクレル/キログラム生			●	■		
	牛乳*	ベクレル/リットル		●				
	地域特産物*	ベクレル/キログラム生		●				
海洋試料	海水	ミリベクレル/リットル			●	■		
	海底土*	ベクレル/キログラム乾土			●			
	藻類*	ベクレル/キログラム生			●	■		
	貝類*	ベクレル/キログラム生			●			
	魚類*	ベクレル/キログラム生			●			

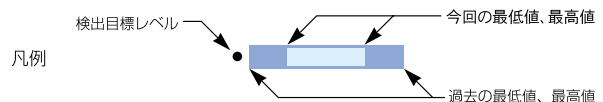
*) 今回は検出目標レベル未満

試料採取期間 平成18年3月～5月		ストロンチウム-90濃度						
		単 位	0.01	0.1	1	10	100	1000
陸上試料	土壌	ベクレル/キログラム乾土			●	■		
	牛乳*	ベクレル/リットル	●					
海洋試料	海底土*	ベクレル/キログラム乾土			●			
	藻類*	ベクレル/キログラム生		●				
	貝類*	ベクレル/キログラム生		●				
	魚類*	ベクレル/キログラム生		●				

*) 今回は検出目標レベル未満

試料採取期間 平成18年4月～6月		トリチウム濃度						
		単 位	0.01	0.1	1	10	100	1000
陸上試料	陸水	ベクレル/リットル			●	■		
海洋試料	海水	ベクレル/リットル			●			

*) 今回は検出目標レベル未満



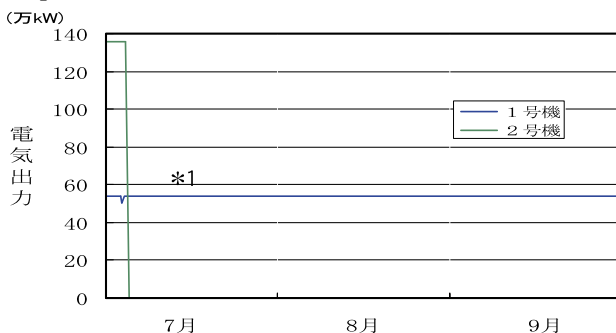
※検出目標レベルとは、検出器の性能、試料の量・形状、測定時間等によって検出できるレベルが違うため、試料ごとに、検出値が有効となる目安として決めているレベルです。

図中で「●」で示したものが検出目標レベルです。

青や水色の横棒がなく、「●」のみが記載されているものは、これまでセシウム-137、ストロンチウム-90、トリチウムが検出目標レベル未満であったことを表しています。

志賀原子力発電所の運転状況（平成18年7月～9月）

[運転線図]

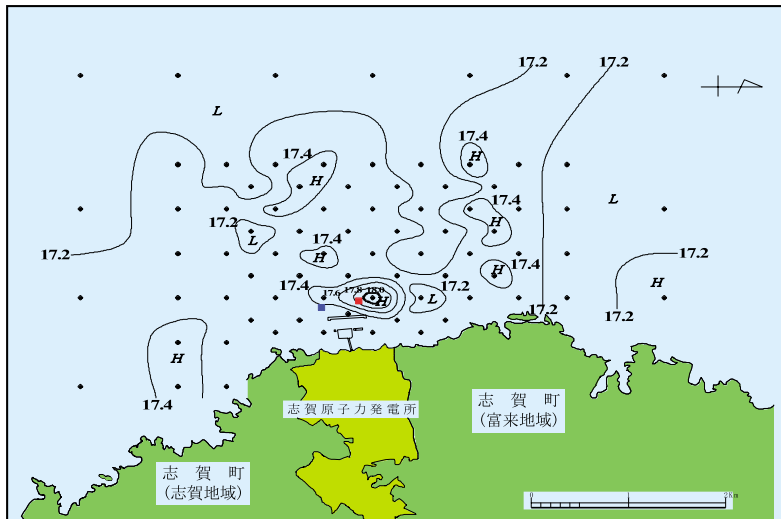


[特記事項]

年 月 日	内 容
平成18年	
7月3日～4日	制御棒パターン調整(1号機)
7月5日	発電機解列(2号機)
7月5日～	蒸気タービン点検(2号機)
*1: 7月1日 ～9月30日	定格熱出力一定運転中(1号機) (発電機出力53.9万kW～54.8万kW、 制御棒パターン調整中を除く)

II 温排水影響調査（平成18年度春季）

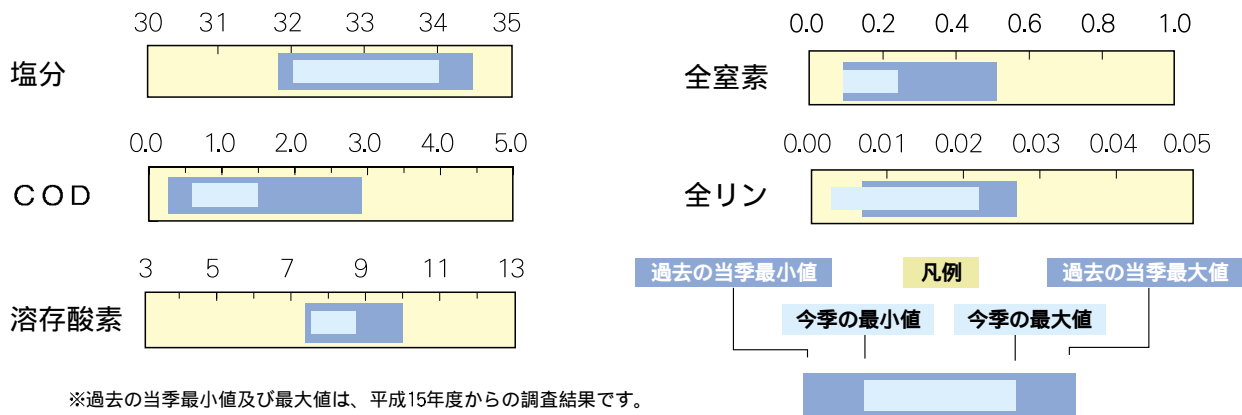
1. 水温調査結果(調査日：平成18年5月24日 午前) 水深1 m



※ ■は1号機の放水口位置、■は2号機の放水口位置を示す。

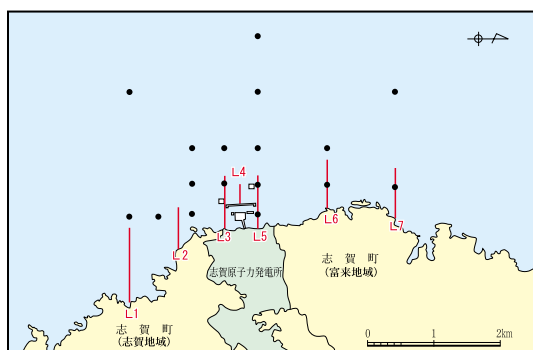
〈温排水の状況〉
 温排水調査期間の5月22日～6月5日の間は1号機は停止中であり、2号機は運転中でした。

2. 水質調査結果(採水日：平成18年5月24、25日) (単位：mg/l ただし塩分を除く)



※過去の当季最小値及び最大値は、平成15年度からの調査結果です。

3. サザエ生息調査結果(調査日：平成18年5月26, 28, 30日)



●：水質測定点 |：サザエ生息調査測線

調査測線	水深 (m)	調査面積 (㎡)	調査結果 (平均個数)	過去の調査結果 (平均個数)
L 1	3～20	125	5.6	6.0～8.0
L 2	3～20	125	3.8	2.6～6.6
L 3	3～20	125	5.2	2.6～5.2
L 4	15～20	50	1.0	0.0～1.5
L 5	3～20	125	3.2	7.2～8.4
L 6	3～20	125	1.2	5.0～11.0
L 7	3～20	125	13.8	13.0～19.8

水温調査：2号機温排水浮上点近傍では、周辺と比べ水温が高かった。同一水深層での温度差は、0.2～1.7℃であった。鉛直的には、上下層間の差は大きかった。塩分については、同一水深層での塩分差は、0.4～1.6であった。鉛直的には、上下層間の差は大きかった。

水質・底質調査：これまでの春季調査結果と比較すると、水質調査及び底質調査では、一部の項目を除き、ほぼ同程度の結果であった。

海生生物調査：これまでの春季調査結果と比較すると、マクロベントス調査では、平均個体数は少なかった。メガロベントス調査では、サザエの平均個体数は県調査で少なかった。稚仔調査では、平均個体数は多かった。動物プランクトン調査では、平均個体数は電力調査でやや少なかった。その他の項目については、ほぼ同程度であり、全体として大きな変化は認められなかった。